

葛原勾当の心象風景

——『葛原勾当日記』とその和歌をめぐる——

工 藤 進 思 郎

幕末から明治初期にかけて三備を中心に活躍した葛原勾当（一八二一—一八八二）は、生田流の琴師範として日本音楽史上に名を留めるばかりでなく、盲目の身でありながら、二十六歳の天保八年から四十数年間の長期にわたり、自ら考案した印刷用具を使って日記を付けた人としても著名である。その日記は三帖二冊から成り、木活字や罫枠定規等の印刷用具一式とともに、現在は広島県的重要文化財に指定されて、葛原家の菩提寺である同県深安郡神辺町大字八尋の恵日山蓮乗院に保管されている。半紙を横に二つ折にして切り、これを袋綴にした横帖形式のものが多く、各冊一行の字数は六字—一七字で、年次によってそれぞれ異なるが、一行一〇字のものが最も多い。

そもそも勾当の日記が広く世に知られるようになったのは、嫡孫の葛原麟（一八八六—一九六二）によって、『葛原勾当日記』と題され、全文にわたる翻刻本（私家版）が刊行された大正四年

十一月以降のことと言ってよい。四六判、七〇〇余頁のこの私家版『葛原勾当日記』（以下、『私家版日記』と略記する）は、原本さながらの忠実な翻刻として学術的にも注目されるとともに、これによって初めて葛原勾当の存在を知り、その真摯な生きざまに「ただならぬ共感」を覚えた人は、かの太宰治のほかにも、決して少なくはなかったはずである。

本稿は、天賦の才に恵まれたこの一流盲楽人の内面生活の一端を、主に日記に挿入された和歌の考察をとおして探ってみようとするものであるが、本題に入る前に、まずは勾当の経歴とその日記について一通りの紹介をしておきたい。なお、日記本文の引用は、主として上記の『私家版日記』によったが、文政十年（十六歳）から天保七年（二十五歳）に至る一〇年間のいわゆる稽古日記（代筆）については、小倉豊文校訂『葛原勾当日記』（昭和五十五年、緑地社。以下、『校訂本日記』と略記する）所収のものによって掲げた。この『校訂本日記』は、勾当没後百年記念事業の一環として出版されたもので、『私家版日記』では省略されて

いた若き日の代筆による稽古日誌を新たに収録したほか、全体を漢字交り文に書き改め、現代の読者が通読し易い本文を提供しているところに特色がある。しかしながら、その表記を一律に現代仮名づかいに統一してしまったのは、通読の便を図るためとはいえ、やはり問題が残ると言わざるを得ないだろう。この日記は、音にすぐれて敏感な感覚を持った盲目の楽人が、耳で聞き覚えた俗語や方言を、そのままの形で今日に伝えた貴重な国語資料でもあることを忘れてはならないからである。

二

葛原勾当は文化九年（一八一二）三月十五日、備後国安那郡八尋村（現、広島県深安郡神辺町大字八尋）の庄屋矢田重知・ひで夫婦の長男として生れた。諱名は重美、幼名は矢田柳三、のち琴之一、さらに美濃一と称し、また一泉と号した。三歳の時に痘瘡を患って両眼を失明したが、音曲への興味に救われ、九歳より備中国小田郡大江村（現、岡山県井原市）の警女お菊を招いて筆曲を習った。十一歳を迎えた文政五年（一八二二）、上京して生田流琴師範松野勾当（後、検校）の内弟子となり、菊岡・八重垣両検校の指導をも仰いだ。十四歳の年に座頭に任じられ、翌年、業成つて帰国。その後は郷里に在つて琴曲の師匠を勤めるとともに、九回にわたつて上京している事実からも察せられるように、進んで新曲の習得につとめ、また自分の技を磨くことを常に怠らな

かった。二十歳の年には座頭支配の久我家より「美濃一」の称と「葛原」の苗字を許され、次いで二十二歳の天保四年、勾当の位階を授けられた。以後、葛原勾当と呼ばれるようになり、明治三年の称氏届出にあたつても、「矢田」を称さず、勾当名の「葛原」をもつて正式な氏とした。

二十五歳の天保七年（一八三六）、備中国後月郡井原村（現、岡山県井原市）の庄屋田中彦兵衛（母ひでの兄弟）の長女あさと結婚した。かくて翌八年の元旦を期して木活字による自捺日記を付け始め、そのための用具一式を収めた小箱は、出稽古の旅先にも必ず携行した。岸辺成雄氏によれば、勾当の出稽古先は備後・備中・備前三国を中心に、福山・松永・尾道・井原・笠岡・岡山など約一〇〇の町村に及び、育てた弟子の数はおよそ五〇〇人に上つたという。明治十五年（一八八二）九月八日没、享年七十一。八尋村の葛原家墓地に葬る。

右は、「校訂本日記」に付載された「葛原勾当年譜」その他の諸資料に基づいてまとめたものであるが、このほかにも伝えられる勾当の逸事は少なくない。しかし、この日記に取材した小説「盲人独笑」の「はしかき」において太宰治も述べているように、その多くは勾当の「末技」に属することと省略し、ここでは勾当没後六年目に成つた坂田丈（号、警軒）撰文の「琴師葛原勾当碑」（明治二十一年）の中から、次の二条のみを抄出しておく。

人、或勸師進階。答曰、吾勾當而足矣。何須納金買検校。

師雖幼失明、而有奇巧。所謂八雲琴者、多出師考案。而中山氏專有其名、師不敢爭也。

（私家版日記）所掲

金銭さえ納付すれば、盲人最高の「檢校」の位階も容易に入手できる当時の風習を忌避して、これを受けなかった勾当の潔癖さと、竹琴「八雲琴」の発明者たる榮譽をも深く人に譲った謙虚な人柄とを讀えた言葉である。世の名利をよそに、ひたすら音曲の道に悠々自適した勾当の生涯と、その芸術家氣質を彷彿とさせるにたる逸話と言わねばなるまい。

すでに述べたように、勾当は十六歳を迎えた文政十年（一八二七）の春から、人に代筆させて稽古日誌を付け始めたが、これらは「琴三味線控」「手帳」（以上、文政十年）、「稽古控帳」（同十二年）、「年中万賞帳」（天保元年）などと題されていることから推察されるように、出稽古先・弟子の名・曲名等を記しただけの無味乾燥なメモの羅列にすぎない。その一例を示せば、

天保六年未正月より。

正月四日。大江村、田郷へ参。三味線、なのは。琴、竹生嶋。同九日。槇ノタハ、菊寿方へ参ル。菊寿稽古、三味線、七小町。井ばら、藤市稽古、三味せん、七小町。琴、同。

（天保六年）

のごとくである。無論、これとて出稽古先が年を追って拡大していった様子や、折にふれて上京していた事実も知られ、若き日ににおける勾当の活躍を伝える貴重な資料であるには違いない。けれ

ども、みずから木製活字を用い、その一字一字に思いをこめて丁寧に捺し続けた天保八年（一八三七）以降の日記の記事と読みくらべてみるなら、そこに雲泥の差異の存することは一目瞭然と言わねばならない。

○正月一日 同よめる。

たちかある。としのはしめは。なにとなく。

すがこころも。あらたまりぬる

やまうば。ことにて。五へん。

○同二日 ちちこじし。ことにて。十二へん。おふへむら。ち

よみ。八つとぎにきたる。あずましし。さみせんとあわせ
たることそのかずをしらづ。

おもうち。しらへてあそぶ。いとたけの。

かづにひかれて。けふもくらしつ

ちちこじ。同五へん。

（天保八年）

こんな調子で始まる勾当の自捺日記の原本に、私が初めて接したのは、もう三十年以上も昔のことに属するが、各行の文字列に寸分の乱れもなく、行間と字間もきちんと揃えられた見事な書きざまに驚嘆した記憶は、今もなお新しい。それにしても、目の不自由な人に、どうしてこのようなことが可能であったのか。近年、二度にわたって神辺町八尋の蓮乗院を訪れ、日記の原本と印刷用具一式の入った木箱をつぶさに拝見するとともに、住職の筒井清道氏から実物の模型による印字の実演を指導していただくに及ん

い	ち	よ	ら	や	あ	ゑ	一	六
ろ	り	た	む	ま	さ	ひ	二	七
は	ぬ	れ	う	け	き	も	三	八
に	る	そ	ゐ	ふ	ゆ	せ	四	九
ほ	を	つ	の	こ	め	す	五	十
へ	わ	ね	於	え	み	ん	正	日
と	か	な	く	て	し	志	月	同

巻「於」の二字は繁体仮名

号なのであった。

「い」行七字について言えば、右側面の線刻はいずれも一本で、左側面には上から順番に「い」は一本、「ろ」は二本という具合に線刻が入れている。つまり、右側面の線刻数は右から数えた場合の各行の配列順位を示し、左側面の線刻数は上から数えた場合の各段の配列順位を表わしているのである。ただし、この方式は「ゑ」行の七字までで、「一」「五」には右側面、「六」「十」には左側面に、それぞれ一本―五本の線刻を入れ、また「正」は右・左・背三面に一本ずつ、「月」は背面に二本、「日」は背面に三本、「同」は背面に四本の線刻が入っている。以上の

で、私は長年の疑念をようやく晴らすことができた。長さ二六センチ、幅一センチ、深さ四センチの木箱の中には、上図のように六三字の木活字が整然と納められている。そして各活字の右側面・左側面・背面に一本―七本の横線が刻み込まれているが、これこそ手探りで間違いない活字を取り出すための、いわばコード番

六三字のほかに、「々々」と「、」を一本の両端に彫ったもの、同じく「奉」と「お」、「御」と「候」、「ッ」（濁点）と「ハ」の各セットがあり、「申」もあつたはずだが、その活字は現存しない。また日付の頭に捺す大きな白丸と句読点用の小さな白丸のための竹筒、誤字抹消用の丸棒および角棒もあり、これらは印墨壺とともに木箱の右方に雑然と納められている。

木箱の中には、さらに二本の細長い木製の野杵定規が存する。長さ二三・八センチ、幅一・三センチで、杵の数は一九箇あり、その中に活字をはめ込んで印字する仕組みになっている。すなわち、二本の野杵の上下を特製のピンで固定させて、第一行の印字が終わったら、その野杵は二行目の野杵の次へ移し止めて第三行用とし、第二行を捺し終えたら、またその野杵を第四行目に移動させる。根気のいる作業ではあるが、こうして各字間・行間を等間隔に印字することができたのであった。昭和十二年、来日中のヘレン・ケラー（一八八〇―一九六八）が、勾当の日記とその印刷用具のことを知らされた時、「東洋のタイプライターは盲人が発明した」と言つて感激したというが、けだし勾当の用意周到な創意工夫には誰しも敬服するほかはないであらう。

三

自捺日記の第一冊（天保八年）が和歌二首で始まり、過去十ヶ年に及んだ代筆による稽古日誌との違いを鮮やかに印象づけてい

たことはすでに指摘したが、その後も勾当は、折に触れて詠んだ多くの和歌を日記中に挿入しており、その数は合わせて二三七首（内、他者詠一七首）の多きに達する。しかし従来、これらの和歌について言及した人はきわめて少なく、佐佐木信綱が『私家版日記』に寄せた序文の中で、

殊にまた、そのうちに挿まれたる和歌に至つては、口を衝いてなりし即詠のうちに、言ふべからざる味ひあるものに富めり。かつ聴覚に関する作比較的多きは、もとよりその所なるべけれど、また一特長となすに足るべし。

〔私家版日記〕序、一〇頁

と述べて一首を掲出するとともに、後年の著『盲人歌集』において勾当の和歌一九首に評釈を加えているのは、むしろ珍とすべきことと言わねばなるまい。

つとに佐佐木信綱も指摘しているごとく、勾当の和歌には「聴覚に関する作」が確かに多い。年々の元旦詠について見ても、あらたまの。としのはしめは。うくいすの。

こへもさらなる。こゝちこそすれ

（安政五年正月一日）

あかつきの。かねのひゝきも。あらたまの。

としのはしめは。うれしかりけり

（安政七年正月一日）

にわとりも。こゑをかざねて。あらたまの。

としのはしめに。たちかへりなく

（明治元年正月一日）

のように、鳥の声や鐘の響きにことさら耳を傾けることによって、迎春の喜びに浸っている趣を詠んだ歌が目立つ。鶯の声は勾当の最も好んだものの一つであつたらしく、それを聞き得た喜びもさることながら、むしろ聞けなかつた時のもどかしさを歌つた、

うくいすは。まてときなかつ。なにをかわ。

たちゆくはるの。しるしとやせん

（慶応四年正月二日）

きゝなれし。やとのうくひす。こゝろあらは。

たつねてこゝに。きなかざらん（同年三月十一日）

うめなつて。きなかざらん。ことしより。

うゑてもきかん。うくひすのこへ（同右）

などの作にこそ、鶯の声に執する勾当の気持がよく表われているのではなからうか。三首目の初句「うめなつて」の「つ」は、『校訂本日記』が指摘しているように「く」の誤印と考えられる。そのほか、蟬・秋虫・鹿・雁なども、もっぱら鳴声に因んで歌われているが、いずれも伝統的な素材であるだけに、その歌柄はやや平凡と言わざるを得ないものごとくである。

ふれかしと。おもいしあめの。おうそらも。

なくにやはるる。せみのもちゑ

（天保八年七月十二日）

なくむしの。こゑもなかるゝ。こゝちして。

あわれいやます。あきのかわもと

(天保十三年七月二十三日)

なくこへの。わきてあわれに。きこゆるわ。

つまなきしかに。ありやしぬらん (同年十二月二日)

おきすゝき。またほにいてぬ。やまさとに。

たかくきこゆる。はつかりのこへ

(弘化二年七月二十四、五日)

これらに對して、川の水音や軒の雫の音を詠んだものには、さすがにこの人らしい独自の歌境を見出すことができる。

かわみつの。なかるゝこゑを。きくにさゑ。

あきのいうへわ。さひしかりけり

(天保九年九月五日)

このかわの。ひさしくたゑし。みつおとを。

ふりかゑしたる。けふのあめかな

(天保十年六月十九日)

あらひたる。ふたつのかわに。みつまして。

いつれおゝしと。きゝまといける

(同右)

あめふれは。いなはにひとの。こへたゑて。

のきのしづくに。さひしさそます

(嘉永五年九月二十四日)

一首目の第二句が「流るる声を」となっていることに注意した

い。川音に親炙する気持が「声」と言わしめたのである。三首目

の初句「あらひたる」の「あ」は、「な」の誤印と見なすべきで

あるが、第四句の「おゝし」については、「雄々し」とも、また

「多し」とも読めるもののようで、いま俄には決めがたい。しか

し、どちらに解するにしても、これは雨水のために増水した二つ

の川の水流の音を聞き分けようとしているのであって、勾当の

「音」に対する興味ないし好奇心の強さをうかがわせる歌と言っ

てよい。四首目は人声の絶えた直後の静寂を巧みに捉えており、

降り積む雪の音を詠み入れた、

をとたかく。ふりつむゆきに。ひとりねの。

さひしさまさる。たひまくらかな

(安政四年二月二日)

の一首とともに、かすかな「音」によつて触発される音楽人の孤独を見事に表現した歌として印象深い。

次に、「風」を詠んだ歌が目につくのは、嗅觉・触觉に関する

歌が見られることとともに、これもまた勾当和歌の特色の一つと

言つてよいだろう。

ねやのとに。まつふくかぜの。おとつれて。

さむしさまさる。あきのよなよな

(天保八年十二月七日)

のるかこの。まよりかせの。ふきいれて。

ゆきはふまねと。ふむこゝちせり

(安政四年二月二日)

みやまへに。すまいしをれば。うめのはな。

にほうそはるの。しるしなりける (同年二月五日)

ゆめにたに。みられぬよはの。ふしのねを。

いしなれはこそ。てにふれてしれ

(明治八年六月二十四日)

最後に掲げた一首は、その前文に「とくながうしのこのみにつき。やかくせきをよみ。たんざくにするす」とあるのによつて知られるように、徳永氏(大人?)秘蔵の夜蘇石に手を触れさせてもらった返礼として、わざわざ短冊に捺して贈った歌である。前述の野梓定規に一九箇の枠が作つてあつたのは、短冊に和歌を二行にわたつて印字する場合、上の句一七字と下の句一四字に分けて捺すことをも考えていたからにはかならない。

四

聴覚・臭覚・触覚に関する歌を紹介してきたが、じつは視覚に関わる和歌もないわけではない。太宰治が小説『盲人独笑』の初めにエビグラムとして掲げた、

はなさきて。ちりにしあとの。このまより。

す、しくにほふ。つきのかけかな

(弘化二年六月五日)

の一首は、「よる。まつこのまより月さやかにみゆると。ひと

の申さるゝ」のを聞いて作つたもので、『盲人歌集』の中で佐佐木信綱も評しているように、見えない世界の風物を目に見るがごとく鮮やかに叙した歌として注目される。これは歌会の席における作と思われるが、題詠歌として詠出されたものには、このような叙景歌が多いのである。実景を見ることはできなかったけれども、それだけにむしろ自由に空想の世界に遊ぶことができたのかも知れない。これらの歌に「見ゆ」「見る」および「眺む」の語が多用されているのは、まさに心象としての風景を心眼によつて捉えていたことを示すものと言えよう。

ふゆがれをかくよめる。

たちならふ。あまたのこつゑ。ふゆかれて。

いとおもしろく。みゑわたりけり

(天保十一年十月二十五日)

おきをながむる

かせふきて。なみたつおきの。あまおふね。

いまもしつむと。みへにけるかな

(天保十三年十月十三日)

ふゆのつき

いけみつに。うつるをみれば。ひさかたの。

つきのいろにも。ふゆわしられつ

なつのつき

た、ひとり。こゝろのまゝに。なかむれば。

(同右)

しすかにする。なつのよのつき

(天保十三年十二月二日)

しかしながら、現実には盲人なるがゆえの不自由は如何ともなしがたい。そういうわが身をかえりみて詠んだ歌二、三首を挙げてみるならば、

おなしよに。すみづるかいも。なかりけり。

あうてうことの。まゝならぬわ

(天保十一年正月二十九日)

なにことも。ひとのこゝろに。まかすみは。

いつをそれとも。さためかねつる

(弘化三年八月二十三日)

み、なくは。などかこゝろの。まとわまし。

きかねむかしそ。こひしかりける

(嘉永七年七月十一日)

のごとくである。一首目は大熊氏に贈った歌、他の二首は出稽古の要請を受けての詠である。「耳なくは」の歌は、前文に「いよのくに。まつやまから。たのむけれど。ゆけば三ねん。かゝる。ゆかねばすまず。はて。なんとしたが。よかんべい。それについて。うたをよんだ。きひてもくんない」とある。ままたらぬ身の不自由を嘆く気持は表面に出さず、もっぱら諧謔をもってそれを封じ込めたような一首になっている。この種の諧謔を弄した箇所は日記のあちこちに見受けられ、勾当の恬淡とした楽天的性格を

うかがわせるものとして注目しなければならない。

なにほどの。つみやむくひの。あらわれて。

かくまでわれわ。はをいたむらん

(天保九年五月八日)

はがはしり。よにすむかいわ。なけれども。

ねずみとらずの。ねこよりましか(同年五月十九日)

数日來の齒痛に苦しみながらも、狂歌まがいのこんな駄洒落を飛ばして、努めて明るく振舞おうとする姿勢を決して崩さなかつたところに、どうやら勾当の生き方の基本があるらしい。そういう楽天的な人生観がよくうかがえる歌二首を、その日の記事とともに掲げれば、次のごとくである。

めをうしない。ちかごろは。はもぬけ。みゝはかりになりて。

かくよむ。

はなもちり。もみちもかせに。さそはれて。

すみのこりたる。つきのかけかな

(慶応四年三月二十四日)

こん日か一月一日の。はじまり。さよう。

あすかかは。かわるゆ^ふちせの。よのなかを。

なかれわたりの。をもしろきかな

(明治五年十二月三日)

前の一首は、数々の身の障害を乗り越えてきた人生を、「花」「紅葉」「月」にたとえて歌ったもので、やや狂歌風ではあるが、

それだけにかえて明るい余裕の感じられる歌になっているのであるまいか。後の歌は、「この三日を正月一日と。こゝろゑ。なにごと。れいねんのごとくに。いたせよとのをんふれだしによつて」云々という前日の日記の記事から知られるように、太陽暦の採用によつて、この日が明治六年一月一日となったことに因んで詠んだものである。「今日が一月一日の始まり。左様」と、その事実を納得しようと努めてはいるものの、日記の日付は相変わらず前年十二月の「三日」になっているところに勾当の戸惑いが見てとれる。けれども、そういう世の潮流に逆らうことなく、むしろその変化を楽しむことに努めてきたのが、この人の人生であつたと思うのである。

五

それにしても、いったい勾当は誰に和歌を学んだのであろうか。『私家版日記』所収の「勾當の逸話」には、「極めて親しき歌友」として、隣村の歌人鈴鹿秀満（一七九七—一八七七）の名が挙げられている。日記の天保九年四月九日の条に、「よるすゝかへゆきてはなす」という記事が見えるが、この「すゝか」は秀満のことであるに違いない。『国学者伝記集成』続編その他によれば、秀満は安那郡川北村（現、深安郡神辺町大字川北）の人で、父平佐由秀の跡を継いで同村の神辺大明神（天別豊姫神社）の神官となつた。漢籍を隣村の菅茶山（一七四八—一八二七）に、国学を

備中国小田郡神島（現、岡山県笠岡市）の小寺清先（一七四八—一八二七）に学び、とくに和歌に秀でていた。藤井尚澄編『類題吉備国歌集』（嘉永三年序・刊）には、その歌一八首が採録されている。勾当より十五歳の年長であつたから、和歌においては師範格だつた公算が大きい。葛原家に秀満の短冊が多数伝わっていたらしいのも、勾当との深いつながりを示唆するものと言へるであらう。

もう一人は、日記中に三回にわたつて名前が出てくる「おとみね」（右峯）という人でなければなるまい。彼のことは、まず天保十五年五月（日付欠、ただし二十二日以前）の条に、次のように記されている。

おとみねどのにあう。そのときひさしぶりに。うたをすゝめられて。こしおれをよみけるに。よつてか。ちげつと申なをつけられたり。

まつのしたのいづみ

やすらへは。たちさりかたく。なりにけり。

しみつなかるゝ。まつのしたかけ

うたにて。うたになりにくきゆゑにや。ありつらん。しかし月になるとわ。あまり。おもしろからず。

（天保十五年五月）

右峯から歌を所望されたので、「やすらへば」の一首を詠んだところ、似月（いづき）という名を付けられたのであつて、勾当はこ

の名にいささか不満を漏らしているようだが、ともあれ、かなり以前から二人の間に親交があったことをうかがわせる記事として注目しなければならぬ。『私家版日記』のこの条に付された編者の注記に、

右峯氏は当時の歌詠の先生なり。姓は小諸といふ。先生より「勾当似月よみておくる」とて、「目に見えぬころにみづる月花のあらはれわたる糸の上かな 右峯」といふ扇面あり。

（私家版『葛原勾当日記』二七六頁）
とあるのも、勾当と右峯との親密な交流を裏付けるものにはかならない。

しかるに、それから八年後の嘉永五年五月九日の条によれば、右峯は近ごろ竹林小諸と改称して、以前に変わらず人々に和歌を奨め、「そのみちをたゞしくひろめ」ていたが、この日、高屋村（現、岡山県井原市）において頓死したという。訃報に接した勾当は、早速に

ことのはの。みちのとししひ。きへぬれは。

ころなきみも。をしまる、かな

（嘉永五年五月九日）

と詠んでその死を哀惜するとともに、同十四日、「うちだ」において営まれた小諸の追善歌会にも、次の一首を捧げている。

ゆかりある。ひとのみあまた。あつまりて。

たけのはやしに。あそふよはかな

（嘉永五年五月十四日）

右峯改め小諸に関するこれら一連の記事が、勾当の日記の中では珍しく長文になっているのはなぜだろうか。小諸は自ら京の産と称して諸国を歴遊した人で、その経歴には不明な点が多いけれども、言われるように文化八年（一八一二）生とすれば、弱冠四十二歳で死去したことになる。勾当には彼の早逝を悼む気持ちが強かったのかも知れない。しかし、それにもまして勾当を悲しませたのは、一つ年上の気心の知れた歌友として親しみ、かつ歌の道の「ともしび」とも仰いでいた、熱心な若き「師」を失ってしまったという事実ではなかったらうか。

すでに言及したように、右の二人のほかにも勾当は多くの人と和歌の贈答をしており、日記にその名を明記している者だけでも二〇数人に達する。これらの人々との関係を探りながら、贈答歌についても検討しなければならなかったのであるが、それはまた次の機会に譲り、ひとまず本稿はこの辺で閉じることにしたい。

注

- （1）葛原菫編『葛原勾当日記』（私家版、大正四年）に材を得て書いた太宰治の小説に「盲人独笑」（『新風』昭和十五年六月。実業之日本社版『東京八景』所収）があり、小品「文盲自嘲」（『琴』昭和十七年十月。単行本未収録）はその後日譚と目される。筑摩書房版『太宰治全集』第三巻・第十巻にそれぞれ収録してある。

なお、小説ではないが、井伏鱒二「葛原勾当」(小説新潮)昭和三十五年十二月。新潮社版「取材旅行」所収、紀田順一郎「手探りの活字日録―『葛原勾当日記』」(日記の虚実)所収、昭和六十三年、新潮社。等も、勾当への興味から成ったものである。

(2) 岸辺成雄「葛原勾当日記研究余滴」(続日本歌謡集成)巻四付録「月報」16、昭和五十五年十二月。

(3) 前掲(一)の私家版「葛原勾当日記」所収の「勾当の逸話」には、その跡を嗣いだ次男重倫の「諒片」として、大工に木で入歯のあらましを作らせ小細工は自分でしたとか、愛用のオランダ製琉球時計の播除・修繕をしたとか、そんな類の話三〇余が集められている。

(4) 全文六五〇余字の漢文から成り、勾当の故宅の門側に建つ石碑に刻まれている。私家版「葛原勾当日記」のほか、坂田丈の遺文集「警軒文鈔」(池田栢一編、明治三十八年刊)中巻にも収録されている。ただし、互いに小異が存する。

(5) この話は、小倉豊文校訂「葛原勾当日記」(昭和五十五年、緑地社)の「はしがき」にも引かれているが、私は昭和三十四年、葛原商から直接に聞いた。

(6) 佐佐木信綱「盲人歌集」(昭和十八年、墨水書房)二二九―二四四頁。

(7) 「国学者伝記集成」続編(昭和九年、国本出版社)二六一―二六二頁。

(8) 鈴鹿秀満は即吟を得意とし、一日吟「梅百首」(慶応三年)を含む梅の歌四四〇首を集録したものに、葛原しげる編「鈴鹿秀満翁遺詠梅のうた集」(昭和二十三年、備南文化協会)があり、巻頭に佐佐木

信綱の序および浜本鶴資の「秀満小伝」を載せている(菅波寛氏の御教示による)。

(9) 永山卯三郎「看敷市史」8(昭和三十六年、耕文協会)三三二頁。(岡山大学文学部教授)

研究室受贈圖書雑誌目録(一)

(平成五年一月―十二月)

単行本

国文学年鑑(国文学研究資料館) 平成三年
日本古代の伝承文学(守屋俊彦 和泉書院)
平安中期記録語の研究(清水教子 翰林書房)

雑誌・紀要

愛知淑徳大学国語国文 第15号
愛知大学国文学(愛知大学国文学会) 第三十二号
愛文(愛媛大学法文学部) 第28号
青山語文(青山学院大学日本文学会) 第二十三号
旭川国文(北海道教育大学旭川分校国語国文学会) 第九号
跡見学園女子大学国文学科報 21
跡見学園短期大学紀要 第28集
いわき明星 文学・語学(いわき明星大学日本文学会) 第2号
岩大語文(岩手大学語文学会) 創刊号
魚津シンポジウム(洗足学園魚津短期大学) 第8号